



説教要旨 「孤独に歩む救い主」

ルカによる福音書 18章 31～34節

イエス様は弟子たちに「今、わたしたちはエルサレムへ上っていく」そう言って、エルサレムに待ち受けている困難、ご自分の運命、受難について告げられています。イエス様が受難を予告されたのはこれで三度目です。では一度目と二度目がどこにあったかと言えばルカ福音書では9章です。そしてその受難予告の後、エルサレムへの旅が始まりました。イエス様はエルサレムで待ち受けている自らの死を明確に見据えて、エルサレムに向かう決意をされたのです。しかしつき従う弟子たちは、この受難予告の言葉を理解できないまま旅を続けてきました。そして三度目の予告においても同じでした。十二人はこれらのことが何も分からなかったのです。

エルサレムへの旅は、自らの死を神の御心として受け入れ歩まれるイエス様と、最後までそれを理解できず、エルサレムでの栄光を期待してイエス様につき従い歩む弟子たちは、同じエルサレムに向かいながら、イエス様と弟子たちはまったく別の道を歩んでいたのです。

最後の晩餐の後、イエス様がペトロの離反を予告するときにペトロは「主よ、ご一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」(22:33)。と告白したように、彼はすべてを捨てて主につき従い、その命さえも惜しくないと思っていました。しかし、いざイエス様が捕まり、自らもその命が危うくなると、「わたしはあの人を知らない」(22:57)と、自分に関係ないと、そう言ってイエス様を裏切ってしまうのです。

ペトロや弟子たちが、イエス様の言葉の意味を理解したのは、イエス様の十字架上の死によって、自分が罪深く、何の力もないものであることを知らされ、イエス様の復活によって、罪深く何の力もない自分が、それでも赦されたことを知らされてからでした。

ただお一人で、孤独に、十字架の死へと歩まれる救い主の姿がここにありません。私たちの無理解が、イエス様を独りぼっちに歩ませてしまっていることを見つめつつ、この受難週を歩んでまいりましょう。